

## 壊れゆくアメリカ

ジェイン・ジェイコブズ 著

中谷 和男 訳

日経BP社

.....

### 評 者

東洋学園大学大学院現代経営研究科教授

鞍谷 雅敏



「壊れゆくアメリカ」という標題から、本書は金融危機後のアメリカを論じた著作であるとの印象を与えるかもしれない。しかし原著は2004年の刊行で、金融危機が起きる以前の書である。けれども著者は、居住するカナダのトロントでも住宅価格が急上昇し、住宅バブルがはじける寸前になっている状況を、早くもこの時点で観察している。また、住居費の高騰の結果、たとえば貧しい若い家族などにもホームレスが増えていることや、ワーキングプアが慈善団体の炊き出しに頼るなど経済が悪化していることを書きとめている。

著者のジェイン・ジェイコブズは、マンハッタンの下町で暮らしていた当時、「アメリカ大都市の死と生」(1961年)を執筆し、“都市は、住宅地でもありオフィス街でもあるなど機能をいくつも備え、子供・高齢者・企業家・芸術家など多様な人々が住み、古いものと新しいものが集中的に混在しているときに、魅力的で活力を発揮する”、と主張して反響を呼んだ。

彼女は、その後、重要な著作をいくつも執筆し、2006年に亡くなった。本書は、彼女の絶筆となった著作である。この本の中で彼女は、アメリカやカナダのもつ文明はいくつかの柱に支えられているが、これらの柱は徐々に腐食していついていって、かつては活力に満ちた文明が失われてしま

うのではないかと警鐘をならす。

一つは、住居費の高騰に加え、モータリゼーションにともなう郊外への無秩序な都市拡大が、家族と地域社会を崩壊させつつあり、地域社会が機能しなくなって住民の子育てもむずかしくなっていること。二つめは、規模の経済を追求してマンモス化した大学が、卒業証書を量産する企業へと墮しており、批判精神や理解力の深さを刺激し評価する教育から遠ざかりつつあること。三つめは、科学的精神を喪失した科学が文明を破壊しつつあること。四つめは、課税システムがゆがみつつあること。五つめは、弁護士・医師・建築家・公認会計士などの知的プロフェッショナルは欺瞞行為・完全な犯罪・犯罪に近い不正行為に陥らないように自ら闘わなければならないにもかかわらず、その自己管理能力が弱化しつつあることである。

このようにジェイコブズは、多様な問題を取りあげているが、他方、それらを論じる視点には共通するものがある。それは、“複雑で生きた文明を構成する無限の要素は、口伝えで、あるいは具体的な例をあげることで、生きて伝えられていく。---文明というものは、熱心に若い世代を教育して、実践し次世代に伝えようとする。---文化を創造する者であれ、それを享受する者であれ、

人々は数知れぬ文明のニュアンスに触れて、それが経験を通して初めて自分のものとして統合される”、という本書の認識である。この考え方は、家族・地域社会・学校・企業・プロフェッショナル仲間などの内部において、多様な専門性や特性をもつ人的資本の間の密接な触れ合いや相互作用が進む中から、新しい何かが生まれてくるとの見方であろう。

都市の活力を考えることから始まったジェイコブズの着想は、中小企業群が元気に活動している中小規模の都市において、よく具現しているように思われる。本書の中で、彼女はトロント郊外のブランプトンを取りあげ、犯罪発生率がカナダで最も低く、最もコスモポリタンで、経済的にも最も高度な都市であるとして注目している。そのほか、私が訪れたことのある地域で言えば、マンハッタンの下町や北イタリアの都市がそれにあたるかもしれない。二年ほど前、私はソーホー地区などマンハッタンの下町をしばらくぶりに訪問して、その変貌に驚いたことがある。そしてその見聞を、“治安が良くなり、以前は問屋街であった堅固な建物等が活かされて、ブランド・ショップ

や中小の個性的な店が立ちならび、レストラン、大学など、多様に分散しつつ拡大していた。---職住近接的で活気に溢れる地域の形成が、ビジネスの創出・成長と併行している”、と記したことがある。日本では身近な地域として、住宅地であり、ハイセンスな商業エリアがあり、アニメ産業やエレクトロニクス産業が活動する武蔵野市・三鷹市などの例が思いあたる。

最後に、本書がもつ日本への含意を考えよう。文明の柱が腐食しつつあるとジェイコブズが警告した諸点には、日本についての洞察であると思える面も多く、日本の将来を広い視野をもって有機的に考察するうえで参考になろう。

とくに世界的な不況で海外需要が伸び悩むこと、また人口の減少傾向で地方都市が空洞化圧力を受けることが懸念されている日本において、地域社会の活力が甦り、そこに中小企業群がイノベーションの担い手として成長することは、これまで以上に高い社会的価値をもつであろう。その実現に向けた環境整備を考えていくうえで、ジェイコブズの観察と着想は思考を深める一視点を提供していると思う。